



中国公案小説の系譜 (其巻)

竹内 誠

公案小説とは耳慣れないことばだと思うので、まず、その説明からはじめたい。公案とは、ふつうは禅のことばであるが、ここでは公文書、狭い意味での裁判や犯罪にかかわる文書を指す。犯罪にかかわる事件が起り、それを解決する過程を描いた娯楽小説を、日本において、以前は探偵小説、のちに推理小説と呼び、最近では、ミステリーというほうが優勢のようである。差し詰め、公案小説とは、きわめて雑駁ないい方であるが、日本でいうところのミステリーのジャンルにはいるといったらよさそう。

今を遡ることおよそ千年前、日本が平安、鎌倉時代であった頃、中国は宋(960~1279)という王朝が支配していた。宋は前時代である唐が実権を握った軍人のため滅亡したことに鑑み、徹底したシビリアンコントロールを行った。おかげで太平の世が続き、文化的繁栄を齎すこととなった。都、汴京(現在の河南省開封)だけでも人口100万人を擁し、未曾有の活況を呈していたことは、現在残されている絵巻「清明上河図」や都市繁盛記『東京夢華録』などによって、一斑を伺い知ることができる。その後、北方民族が興した金によって、中原を追われ、臨安(現在の浙江省杭州)に遷都したが、町の賑わいぶりは衰えなかった。結果、特に都市部の民衆たちの生活にゆとりができ、それが娯楽を産みだす要因となった。当時の都市繁盛記ともいうべき随筆には、娯楽に関する記述が散見するので、それを手がかりに話を進めてみよう。娯楽のなかでも、日本の講談や講釈にあたる「説書」なる語り物が、ことのほか人気を博していた。何しろ、宮廷でも、貴人たちに通俗的な軍談などを話して聞かせる役人がいたといわれる。演じられていた具体的な内容を、今となっては知るべくもないが、幸いにして、さまざまな演目が存在していたことがわかる。そのひとつが公案で、出し物として「三現身」というタイトルが記載されている。しかし、これだけでは、まっ

たく何のことやら、さっぱりわからない。宋代より、のちの明(1368~1661)の末期に出版された短編小説集『警世通言』に「三たび身を現わし、包籠圖、冤を斷ず」という話が収録されており、



「清明上河図」

「三現身」はその原話であろうと推測される。ここで注目したいのは「包籠圖(以下、当用漢字に改める)」である。「包」は姓で、宋代の初め頃、実在した人物、包拯を指し、「竜圖」は官名で正式には「竜圖閣待制」という。場合によっては、親しみをこめて(?)「包公」とだけ呼ばれることもある。いったい何者かという、天子に意見具申したり、事件を裁いたりしていた人らしい。

正史によれば、「(包)拯、朝に立つや剛毅、貴戚宦官、之が為め手を斂め、聞く者、之を憚る。人、包拯笑うを以て黄河の清に比う。童稚も亦た其の名を知り、呼びて包待制と曰う。京師、之が為め語って曰く。關節至らぬは、閻羅、包老あるのみ」とある。

まあ、要するに、役所においては性、剛直、公明正大のため、偉い人達に畏れられ、子供でも彼の名を知っているくらい有名である、ということ。最後にある「關節」とは賄賂をつかって取り入ること。世の中で、金で転ばぬのは閻魔様と包拯だけ。黄河云々は、黄河百年、河清を待つ、ということばがあるので、包拯は、滅多に笑わなかったのだろう。この御仁、日本では、馴染みはないが、中国においては『三国志』の諸葛孔明や『西遊記』の孫悟空に匹敵するくらい民衆に親しまれ、通俗文学には欠くことのできないキャラクターなのである。つい最近、彼を主人公にした連続テレビドラマ「包青天」が中国で放映されている。

(待 続)

たけのうち まこと(助教授・中国文学)